県立病院ニュース 第１０号

平成１９年７月発行

発行 福島県病院局経営改革グループ　http://www.pref.fukushima.jp/kenbyou/index.htm

福島県ゆかりの医人達

第二回　『蛭田玄仙（1745－1817）』

今から約220年前、今の鮫川村渡瀬に蛭田玄仙という産科医がいたそうです。難産で命を落とす母子を救いたいと志して、座位出産を廃し仰臥位で出産をすること、難産で生まれる胎児の体位の変換を手指をもって行う蛭田流産科手法を広めて農村での多くの産婦の命を救ったとされています。

玄仙の生きた時代の産科の主流は、京都の賀川玄悦という産科医が広めたもので、特に難産の時の胎児の娩出には鉄の鈎を用いるものでした。賀川の産術は「産論」という本に書き記されているそうです。蛭田玄仙の産術は産婦と胎児に傷をつける鉄鈎の使用を廃して手指をもって行うものですが、その術は口伝で伝えられて、玄仙自身の著書は現存しないらしいのです。後に玄仙の弟子であった鈴木三平、富沢黄良などによる本（「産科新編」など）が刊行され玄仙の産科手法にも触れているとのことです。

当時の白河藩主松平定信が「退閑雑記」の中出蛭田玄仙のことを書き記した記録が残っています。さすがに藩主自身は面会をしてはいないのですが、侍医を面談させてその印象を書き残したものらしい。「まず先生は天質敏悟、要望魁偉、慨然として世の弊害を除き人々の困窮を救う志がある」という印象記があり、侍医の専門的な質問、すなわち賀川の「産論」を読んだとか、国外の特殊技法を心得ているかなどにはあまり答えずに、ただ難産は元来死病ではなく、胎児の誘導法により救助しうること、玄仙の術は実地に数多くの出産を扱いながら習得したものであるなどと答えたそうです。また定信候が侍医に託した質問で、難産をどのように治すのか、出生前に男女の性別を知ることが出来るのかなどということに対してはかなり謙遜に、妊婦の出産が始まる前に正常に生まれるか難産であるかを診断し、異常を防ぐことを心掛けている、出産が始まると難産を治すことはかなり難しい。出生前に児の性別を知ることはまだ出来ないでいると淡々と述べていた、と記している。定信候も「玄仙は自分の知っていることは知っている、知らないことは知らないと云い、少しも飾るところがない。このような人こそ真の医師というべし」と文中で褒めています。

蛭田玄仙の産科術等について、二宮陸雄著の「東翁蛭田玄仙とその産科」によれば、蛭田玄仙に関する書物は、先の富沢黄良による「産科新編」他が京都大学図書館に、同じく弟子の一人である沼埜玄昌による「田子産則全書」が東京大学図書館にあるということです。玄仙は1817年鮫川村渡瀬で脳卒中後遺症のために死し、その墓は鮫川村にあるそうです。

～ご意見・ご感想をお寄せください～

親切 信頼 進歩

E ﾒｰﾙ:kaikaku@pref.fukushima.jp　FAX:024-521-7924【病院局経営改革グループ】